

## 続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.04)

### 「良い身なりは悪い生まれを隠す」

・・・馬子にも衣装・・・

通勤途上において、数多く遭遇する路上の小店の一つで、殆ど毎日当地の一流新聞を購入している。最近ではその前を通ると、店番のおばちゃんが、私が注文をする前から、真っ赤な口紅でにやりと笑いながら、いつもの新聞名のことを当然のごとく差し出す。当方もにやりと笑い、時には茶々を入れながら、小銭を差し出す。事の成り行きで、ペットボトル入りの飲料水なども欲しくもないのに購入してしまう。

新聞は政治、経済、芸能、科学、首都版、地方版、スポーツすべて、その他に求人・広告類などの案内が入っているから、最低でも80ページを越す厚さで、これを日本円に換算すると約100円くらいである。

見出しを見て、少ないボキャブラリーを、時には推定を交えながら、頭の中で総動員して、話題になりそうなものしか深くは読まない、極めてコストパフォーマンスの悪い読み方をしているが、それでも世の中の動きは大体分かるものである。

目下の当地の社会事情を反映して、経済関係記事や麻薬がらみの犯罪記事が多い中に混じって、目を引かれるものの一つに、いわゆる当地のセレブ階層とでもいうところの、パーティー風景が一ページ全面、時にはそれ以上にスペースを割いて、殆ど毎日写真入りで掲載されていることである。

経済不況なんて何処の世界かと思うくらいである。なぜこのような記事が、連日一流紙に載るのかは分からないが、しかし、ボラッチョ・ボニート氏が興味を引かれるのは、誰がしがパーティーを開いて、出席者がどうだとか言う話題ではない。そんなことはそれぞれ、「わしゃには、関係のないことだ！」である。

それは出席者の男性陣の服装のことである。女性陣は押なべて盛装というか素敵なおしゃれをしているが、男の方は胸をはだけたノーネクタイがあったり、その他ラフ(と思える)服装が比較的多くみられることである。

もちろん、ハインな人たちの公式パーティー写真などを見ると、男女ともフォーマルな服装なのは言うまでもない。メキシコ人の服装はじつに多彩であるが、一方では結構格式ばったところがある。



通勤や訪問などでは、私の周囲を見る限り多くの人が、黒っぽい背広をビシリと着こなしている。しかし一方、街中の光景を見渡すと、今の朝の気温は東京の10月くらいであるが、厳冬期並みの完全冬支度の人も入れは、半袖の軽装の人もいる。

前回の経験だが、夏でも皮ジャンパーやオーバーコートを着ている人もいれば、冬にティシャツ姿の人もいて、私の頭はその落差に耐えられず、性能の低いコンピューターと同じくすぐ固まってしまい、その都度リセットを繰り返す。

むりやり社会学的な分析をすれば、彼らは他人を気にすることなく、自己を主張しているのだという当たり前の結論しか見出せない。あるいは、マッチョぶりを強調したいのかもしれない。気候のせいもあるが、日本で言う「衣替え」や、クールビーズにせよと言われれば、唯々諾々と従うことなどは、彼らにとって理解できないことだろう。「したければ勝手にすれば、俺は俺流でいくよ」となるのが多いのではなかろうか。

今回のタイトルに採用したのは、「**El buen traje encubre mal linaje**」(エル ブエン トラッヘ エンクーブレ マル リナッヘ と発音し、直訳はほぼタイトルに記した内容である。日本語では思い浮かぶが、あえて考えると原文からのニュアンスとはやや異なるが、サブタイトルのようなだろう)という諺である。

歴史的には、この諺には深い意味が込められているのだけれど、出席者の裏を詮索することは、本稿の目的ではないし不可能なので、ここでは単純にサブタイトルのように解釈することにしたい。

身なりを化粧、あるいは顔の美醜、知識などの言葉に変えても通用するような諺であるが、服装一つとっても、このような感覚的なことは理解するのに難しい。

「理解したと思い込んだときも、実はそれが誤解にすぎないのに、それを誤解だと証明することすら不可能に近い」(イザヤ・ペンダサン著、山本七平訳、「日本教について」、(株)文芸春秋)、ということになる。

服装に関しては、私は普段から関心が薄く、「こうでいいではないか」と、あまり**コウデイ**しない方なので、**コーディネータ**たるウィフが頭を悩ますことの方が多く、しかも目下のところ東の間の単身赴任生活なので、そのコーディネータもいないので、結果的に日本人の伝統たる、「ドブネズミスタイル」と揶揄される、無難な服装で職場に行く事が多い。

それでも時には、少ないながらも持参の服のなかから、少し色調の変わった服を着、ネクタイなどを少し派手目にするなど工夫すると、普段の野暮ったい背広姿からの印象からか、「何て！エレガントだ」などと、女性社員たちに褒められると、複雑な気持ちにはなるが悪い気はしない。

老いたりとはいえ、男心は微妙に心ときめくのである。(2009年2月27日)



この人の被っているのはハンティング、それとも野球帽子、あるいは写真のミス？

ある日の新聞から借用した同一のパーティの二コマ:連日このような記事が、1ページ全面を使って掲載されている。